

自閉的傾向のある幼児の他児との関係に関する一考察

○松井 剛太
(広島大学大学院)

七木田 敦
(広島大学)

1、問題と目的

近年、ノーマライゼーションの理念が社会に浸透して、統合保育は日本全国の保育所や幼稚園に広がり、障害児保育の主流となっている。しかし、現実には、「統合保育場面において、健常児にも障害児にも有効に保育を行っている保育所や幼稚園は少ない」ことが報告されている(園山、1994)。

園山(1994)は、統合保育を成功させるための要因の一つとして、保育者の専門性を挙げており、「保育者がどのように行動するかで、統合保育の有効性は大きく左右される」と指摘している。しかし、実際には保育者は障害の理解や統合保育について熟知していないことが多い(松田、1982)。以上のことから、保育者が実際の保育現場において障害に関する知識や統合保育についての専門性を向上させることが、1つの大きな課題となっている。

特に、自閉的傾向のある幼児は、他の障害児に比べ、その扱いにくさが指摘されており、中でも、他児との関係については、知的障害児よりも乏しく、幼児期後半から他児との関係の問題はかなり増加してくるとされている(Eric Schopler, 1993)。

そこで、本研究では、初めて統合保育を実施した幼稚園において、自閉的傾向のある幼児が園の環境に適應していく過程を観察する。そして、その幼児が適應していく過程を「他児との関係」という視点から分析し、保育者が求められる配慮について考察する。

2、対象児と対象園について

本研究の対象児は、1996年4月12日生まれの子の自閉的な傾向があるK(男)である。Kは、障害児通園施設G園に通園後、4歳よりF幼稚園に入園した。

対象園は、障害児通園施設G園とF幼稚園である。障害児通園施設G園は、学童前の障害児を対象に、少人数クラスで、主に基本的生活習慣の指導を個別に行なっている。F幼稚園は、多人数クラスで友達とかかわりあひながら、個性をのびやかに育てることを目標にしており、Kに対しては、Kの所属クラスの副担任であるS教諭が大部分を支援している。

3、手続き

Kを対象に、著者がG園とF幼稚園での1日の活動に対して参与観察を行い、エピソードを記録した。観察期間は、G園に2001年3月から2001年4月、F

幼稚園に2001年4月～2001年12月である。

4、結果

Kの他児関係の変化から、著者が6つの時期に区分した。以下、各時期におけるKの様子を記す。

1) G園期(2001年3月まで)

Kが障害児通園施設G園に通っていた時期である。

Kはこの時期、他児に興味を示すことは少なく、自分からかかわることはなかった。また、他児からの働きかけに応じることもほとんどなかった。

【エピソード1】物の受け渡し(2001年3月)

男児A: Kに近寄り、渡したいものを差し出す。

K: そっぽを向き、受け取らずに走っていく。

2) 第一期(2001年4月10日～4月13日)

Kが、F幼稚園に入園した直後の1週間である。

Kは他児に対して、自分からかかわりを持つことはなく、同じ場にいることが耐えがたいようだった。自由保育の時間では、Kは常に他児がいない場所へ移動をしていた。

【エピソード2】おやつ後のうがい(2001年4月13日)

S教諭: 手洗い場へ連れて行く。

K: S教諭に従い、手洗い場へ行ってうがいをする。

他児大勢: 手洗い場へぞくぞくと集まる。

K: 手洗い場の近くのトイレへ移動する。

3) 第二期(2001年4月16日～5月11日)

Kが他児の存在を意識し始めた時期である。

この時期、Kに対する他児からの働きかけが増え、接触の機会は増えたが、不意に他児を叩くというようにKは他児を自分の活動を邪魔する存在と認識していたようで、総じて不快感を示していた。第一期に続き、Kが自分から他児とかかわることはなかった。

【エピソード3】お集まりでお話(2001年4月20日)

円状に椅子を置いて座っている。

隣の男児B: Kに対して、声をかけたり、体を触ったりする。

K: 男児Bの方をむこうとしない。

男児B: さらに続ける。

K: 男児の手を振り払い、肩にパンチをする。

4) 第三期(2001年5月13日～6月8日)

Kが他児に興味を持ち始めた時期である。

S 教諭が K と他児との仲介役になり、K が他児と共に遊ぶ機会を持てるようになってから変化がみえはじめた。この時期、K は、他児が遊ぶ様子を遠くから観察していたり、自分から近寄っていったりという行動をするようになり、他児に興味を持ち始めているようだった。それまでは、K にとって邪魔な存在でしかなかった他児だったが、K が、笑顔を見せて、かかわりを楽しむ様子も観察できた。

【エピソード4】おままごと（2001年5月21日）

他児複数：包丁で野菜を切っている。

K：他児が遊んでいる所に入っていく。（S 教諭が K の近くに付いている。）

K：他児が遊ぶ様子をじーっと見ている。

S 教諭：「K ちゃんが包丁使いたみたいで、さっきからずっとみているよ」と他児に伝える。

K：スーっと違う方へ移動する。

K：戻ってくる。

女兒C：包丁をKに渡す。

K：受け取り、花を切り始める。

5) 第四期（2001年6月11日～7月19日）

プール遊びがポイントになった時期である。この時期、F 幼稚園では、新たにプール遊びが増える。水遊びが大好きな K は、プール遊びに没頭するようになり、他児とのかかわりは減っていった。もともと水に対して、ある種のこだわりを持っていた K は、プールの中で場を共有してはいるものの、ひとりで遊ぶことが多く、他児との目立ったかかわりはなかった。そういったことから、プール以外でも他児とのかかわりが減っていった。

【エピソード5】プール遊び（2001年6月27日）

K：登園してすぐ着替え、プールに行き、遊ぶ。

他児大勢：プールに入って遊びだす。

K：1人で遊んでいる。

他児大勢：K以外のメンバーで遊んでいる。

S 教諭：プールの外から、Kに対して水をかけている。

6) 第五期（2001年9月1日～12月12日）

一人遊びが多くなり始めた時期である。

この時期、K は一人遊びが多くなり、自由時間の多くを一人で過ごしていた。他児とのかかわりは、K の世話をしたがる特定の他児とのものが多かった。これは、他児が K と一緒に遊ぶという感覚ではない印象を受けた。それ以外には、K と他児との目立ったかかわりはなく、1日中1人で過ごすこともあった。

【エピソード6】自由保育場面（2001年12月5日）

K：広場を徘徊する。

女兒D：「K ちゃん」と後ろから抱きかかえて、座らせる。

K：なにもしない。

女兒D：Kの頭をなでる。

5、考察

K は、G 園期には他児とのかかわりをほとんど持たなかった。そのため、F 幼稚園では、K が保育を受けるにあたって、保護者は周囲の他児とかかわりを持つことを期待していた。ここでは、K の他児とのかかわりに関して、K と S 教諭との関係から考察する。

K が F 幼稚園に入園して、第一期から第三期にかけて、K が他児とのかかわりを徐々に深めていったことは結果からもわかる。しかし、第四期、第五期に入ると、K は他児とのかかわりをほとんど持たなくなった。

これには、教諭の K に対するかかわりが関係していると考えられる。つまり、K が F 幼稚園に入園して、S 教諭が K に付き添う生活が第一期から第三期にかけてよく観察された。他方、第四期には、K がプール遊びに没頭していたため、S 教諭のかかわりが K 児に伝わっていたのかどうか疑問が残る。また、第五期には、S 教諭は K が一人遊びを十分に楽しめるようにするという方針のもと、K と距離を置くようになっている。

このように考えると、K が他児とかかわりを持つとき、自然と S 教諭が K と他児との仲介役となっていたのではないだろうか。つまり、K と他児とのかかわりが減少した一つの要因に、K と保育者とのかかわりが減少したことが考えられる。

以上の結果から、統合保育の中で自閉的傾向のある幼児に保育を行うときに、保育者は仲介役となり、自閉的傾向のある幼児に対しても、健常児に対しても働きかけをする必要があることが示唆された。特に、保育者が一人の幼児にかかりきりになることは難しいことを考えると、健常児に対して、自閉的傾向のある幼児に対するかかわりを促し、自らモデルとなることが求められるであろう。

6、まとめ

本事例では、統合保育場面において、保育者が障害児と健常児の仲介役となることの重要性が示唆された。しかし、現状では、保育者1人がその役割を担うのは難しい。そのため、園全体の職員の障害児に対する共通認識を図り、全園体制のもと保育を行うためにどうすればよいかを今後の課題として考えていきたい。